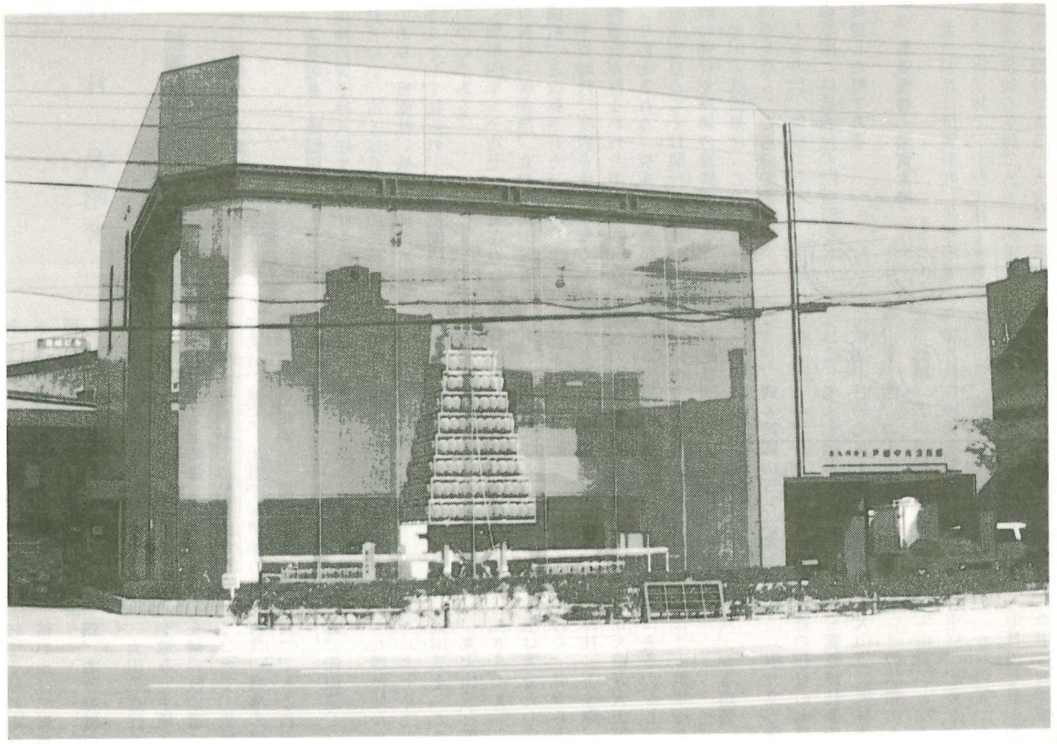
北九州市の文化財を守る会

会　報

№60　62.8.10

発行　北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7—2
森鷗外旧居内
電話（093）531—1604

印刷　博文堂印刷所
北九州市小倉北区長浜町2—22
電話（093）511—1011



戸畑区中央公民館

今迄浅生公民館と同居していた中央公民館が、戸畑駅の正面に向い合った場所に新築、昭和六二年二月五日、オープンした。

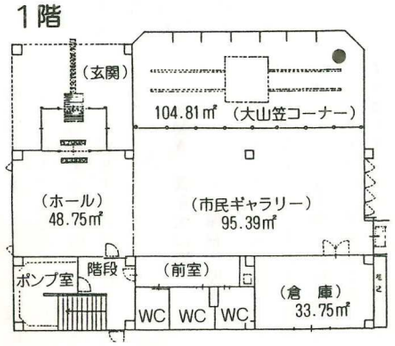
三階建で、駅に向いた方を三階まで吹ぬけ、総ガラス張りにして、提灯山笠の実物を常置し、（祇園祭日以外）大いに国指定重要無形民俗文化財をPRする良い場所を得たことになる。

今までは駅にミニの山笠の模型が飾られたり、かなり以前に、ブロンズの山笠を駅前に建てる案が出たこともあった。

夜は休館日以外は二〇時四十分頃まで点灯されている。

戸畑区中央公民館平面図

1階



山車の形で大山笠のお供をしている。戦前は、東天籟寺、西天籟寺の二山笠があり、最近は、天籟寺地区三山笠、大谷地区二山笠、南沢見地区一山笠と出来て、中学一年生以下の子供はこれに参加している。ところが、小学生も高学年になると幼児と連れだって引張る子供山笠に気恥かしさを感じるのか、参加者が少なくなり、囃子方以外の参加者はほとんど見られなくなってしまう。

中学二年生になると大山笠への参加資格が出来るのだが、それまではどっち付かずの期間である。それを補うために中学生の担ぐ山笠が各地区で生れた。

中原—小中山笠（昭和三五）、西—小西山笠（昭和五一）、東—小東山笠（昭和五八）と相次いで大山笠傘下の小山笠が出来て、昭和五八年現在で天籟寺を残すのみとなった。天籟寺でも、小山笠を作ろうとの声は以前からあったのだが、その意義（中学生に対する社会教育、文化財継承者の育成）は認めながらも、資金面を考えると二の足を踏むという状態だった。然し、昭和五八年祇園祭以後、地区の人々の声が次第に大きくなって来て、天籟寺大山笠運営委員会もこの要望に応えざるを得なくなり、菅原神社総代会に諾り、小山笠復活の行動を昭和五八年十二月から開始した。復活とはいっても、何もかも新規の小山笠の誕生なので、産姿役の運営委員は此の年の冬の異例の寒さの中を資金の調達から諸器具の発注と駆けずり廻り氏子の大きな支援を得て、「小天山笠」が誕生することとなった。昭和五九年六月、菅原神社境内で披露が行なわれ、祇園祭に大山笠のお供をして堂々のデビューとなったのである。これについては、先発の小東山笠、小西山笠を持つ東西両大山笠代表からは種々アドバイスを受け、配慮してもらっている。

以上

紙数の関係で大部省いた所があることを、著者、林さんにお詫び致します。（福田）

＜夜＞

＜昼＞

天籟寺の祇園大山笠

編集後記

この会報が皆様に届く八月は、当市各区の祇園祭も終り、いささか、この会報は時期を失する感もありますが、祭を側面、裏面から見ることによって、そこに庶民の生活史の一端がうかがえ、やはり貴重な資料ともなりますので特集することにしました。

各区の祇園祭についても、このような記録が出ると良いと思います。

バスハイクについて

前号で発表した十月予定のバスハイクはバスが各社とも早々に予約済みということで、やっと十一月二二日（日）にとることが出来ました。次号に詳細を発表しますので多数の参加をお願いします。

事務局だより

▽会報第六十号をお届けします。今回の担当は戸畑支部でした。暑さのなか福田支部長さんお疲れでした。次号は八幡支部です。よろしくお願いします。

▽次号には会員名簿も作成する予定にしております。

▽会費未納の方は納入をお願いします。

▽暑さきびしい候、折角お自愛のほどお祈りします。

「天籟寺大山笠」よりの抜粋

林　昌昭　著

はじめに

福田記

戸畑の祇園山笠について側面的な話を集めたらと前から考えていたが、林　昌昭さんが、昭和五九年十二月一日、付で「天籟寺大山笠、―正しい理解と継承のために―」という冊子を自費出版されました。その後半部分に「祇園祭ミニミニ事典」「天籟寺大山笠物知り帖」など、正面から書かれた山笠の歴史以外に理解に役立つことが多いので、林さんに、この会報に転載し、なほ広く読ませたいと相談申上げた処、心良御承知下さったので、特集のような形で編集しました。

なほ林さんは天籟寺の旧家生れ天籟寺育ちであり、今特定郵便局天籟寺郵便局の局長をされ、山笠では戸畑祇園大山笠振興会保存委員、天籟寺山笠では運営総務をされています。なほ「ひろば北九州」の冊子（87・4号）に「山笠を支える安田一馬さん」という記事をかかれていますので紹介しておきます。

祇園祭ミニ・ミニ事典

一、祇園社（八坂神社）―祇園祭

素戔嗚尊、櫛稲田媛命と、その両神の御子神八柱を祀る社を祇園社といい、古くは八坂氏の氏神様であり、祇園社、祇園天神、祇園さんとして知られ、全国祇園信仰の中心である。

明治四年（一八七一）現在の八坂神社（所在地、京都市東山区祇園町）と改称された。

平安時代に疫病をはらうための御霊会が行なわれたのが祇園祭のはじめとされる。現在では毎年七月十五日から十日間行なわれ、山鉾の進行や神輿の渡御がある。

全国の祇園祭は、この八坂神社の祭をならったものである。

ちなみに、舞妓で有名な（京都の祇園）は祇園社の門前町として発達した町である。

二、素戔嗚尊―須賀大神

素戔嗚尊は伊邪那岐、伊邪那美二神の御子神で、天照大神―伊勢神宮の祭神の弟神であり、出雲系氏族の祖神である、人文神、英雄神とされているが、あらしの神とする自然神格説もある。姉神の天照大神が織られていた布に、剝いだばかりの獣の皮をかぶせて汚してしまい、悲しまれた天照大神が天の岩戸に隠れてしまわれる、という神話天岩窟物語にみられるように、宮廷神話では敵役的な存在である。然し、出雲や紀伊地方では、八俣大蛇退治、植林事業など人間に福祉を授ける神格とされているし、ここ戸畑では武勇の神として尊崇されている。……以下略

三、お汐井汲み

博多祇園山笠では、祭り初日の七月一日に当番町、七月九日に各流れの出場者による「お汐井とり」の行事が行なわれる。これは身を浄めるための砂みそぎ行事で、筥崎前の海岸で砂を採り、山笠の下に吊したり、災難よけに身体に振りかけたりする。

戸畑祇園大山笠においても同様の主旨で「お汐井汲み」行事を行なうが、博多祇園山笠とは違って山笠を担ついで行き、砂を採るのではなく海水を汲む。

祇園中日の七月十四日に、天籟寺、東、西、の大山笠が八幡神社に集結後、若戸渡船の船着場まで八幡神社の神輿を先頭に、先山笠、二番山笠、客分の天籟寺大山笠と順次（大下り）をして、海水を手桶に汲み宮司が祝詞をあげ、榊の枝で手桶の海水を山笠や出場者に祓いかけて無事息災を祈る。

四、お汐井祓い

大山笠巡行の際、大山笠の先頭を進み、手桶に入れた（お汐井）を榊の枝で道に撒いて道筋を浄めることで、世話係がこれに当る。古代の神事の伝承であり、（獅子舞）でもこれが行なわれる。

五、先山笠

八幡神社からお汐井汲に大山笠が（大下り）する際、先頭を行く大山笠を（さきやま）という。

東大山笠と西大山笠が一年毎に「さきやま」になり、天籟寺大山笠は客分として殿（シンガリ）を行く。昔から天籟寺大山笠が八幡神社に下る際、「さきやま」の幹部が天籟寺大山笠のお旅所まで迎えに来るのがしきたりであったが、ここ十数年行われていない。

六、から山笠

（取り立）後のならし担ぎや、祭の初日の七月十三日に青年宿から菅原神社まで担ぎ上げる際は、大山笠に御神体を奉載していない。

この状態のときの大山笠を「から山笠」と呼ぶ。前花、見送り、水引、切幕などを着装していても「から山笠」なのである。祇園の中日の七月十四日、居神祭の奏楽の中にお神移しをするが、御神体を奉載するか否かで担ぎ手の感じる重さが全く違ってくる。信仰心のなせるわざであるのか、小さな祠に奉持出来る程の軽い御神体を山笠にお載せするだけで重みが増すのである。

七、宿開き―青年大山笠事務所開き

天籟寺大山笠では毎年七月一日の夕刻、青年が青年大山笠事務所に集合して、総監督、副総監督などの役付を決め、祇園祭に向って諸準備を開始することになるのであるが、戦前にはこういう名称のものはなく、（お籠り）ということで青年がお宮に集まっていた。（この席で運営、予算も幹部が協議し、各戸毎の寄附金を決めていた）現在、青年宿として七月一日―「宿開き」以後狐落しまで特定の家にお願いして常時使用しているが、戦前は御旅所―神様のお宿―は決まっていたが（若い衆宿）はあっても祇園祭のための青年宿というものはなかった。

（手まりこ）は幹部を含めて各自二本、自分の手で巻き―総数五六十本―祇園祭当日お宮に持ち寄っていたし、食事も各自の家で摂っていたので、現在のような青年宿は不必要だったのである。

八、お籠り

辞書には「祈願のため一定の日数の間、社寺にこもることをお籠りという」と載っている。天籟寺大山笠では大昔は、祇園祭前に青年組全員がお宮にこもっていたようだし、祇園祭に限られたことでもなかったらしい。現在では「お籠り」という呼び名の行事は、祇園祭前の中老の集いに限られていて―昔は中老のこの様な集いはなかった―神社ではなく中老の宿で行なわれる。参集する中老はこれを機に祇園祭に向って意識を集中していくことになる。神社に参籠しなくともその精神は承け継いでいるのである。青年の集いも現在は（宿開き）と呼ばれているが主旨はお籠と変らないし、昔は「お籠り」と呼ばれていた。

九、狐落し

祇園祭終了の翌日、つまり七月十六日に行なう打ちあげ―納会のことを「狐落し」という。祇園祭典中、（祇園風）に吹かれて、まるで狐かなにかに憑きものがしたような、ひどい躁状態にあったものに区切りをつけて平常の精神状態に戻すという主旨である。祇園祭が終った安堵感から、肩のこらない和気あいあいの雰囲気の中で宴がすすみ、青年、中老の幹部がそれぞれの宿におもむいて交歓する。

十、天籟寺大山笠の幕類

十一、前花

省略

十二、手まりこ

市内進行中の山笠に届けられる祝儀のお礼として渡されるものが「手まりこ」である。非常にカラフルなもので、山笠の装飾の一つにもなっているが、氏子の災難除けにしてもらうのが主目的である。

（大下り）の前に神官によってお祓いを受け、お神移しの後に山笠に備えられる。

昔は勾欄と幟たての間に麦わらを束ねたものを置き、これに「手まりこ」を刺して飾っていた。この作り方は、赤、緑、黄、白、四色の紙でそれぞれ小さな円錘形のものを作り、手鞠状に丸くまとめてY字形に割った小竹に取り付ける。昔は（こより）捻りの名人がいて取り付けるのに（こより）を使っていたが今は紙紐を使用している。昔は雄竹を使っていたが、現在の手まりこの竹は雌竹であり、この竹の長さは九一センチである。毎年七月一日の事務所開き後、世話係が主になって、五百本近くの手まりこを作るが、昔は出場者が各自作って祇園祭当日神社に持ち寄っていた。なほ天籟寺大山笠の「手まりこ」は四色であるが、各大山笹それぞれ色の種類が違う。

十三、天下泰平―御幣

奉書紙をたたんで切ったものと麻を幣串に挟み山笠の四隅に備える。御神体を奉載した大山笠は神域になっているので、神に捧げる幣である。天下泰平、五穀豊饒、悪疫退散、息災延命、家内安全を祈っての「祇園祭―山笠行事」なので、この御幣を「天下泰平」と呼ぶ、祇園祭後は「手まりこ」と同じ主旨で山笠役員の家に大事に飾られている。（手まりこ）や子供山笠の御幣と違って、一年に僅か四本しか作られないものだけに非常に稀少価値がある。

十四、獅子頭

木製の獅子の頭、雄雌一対がセットになっている。（獅子舞）の神事では、この（獅子頭）を青年が持って山笠巡行の道を浄めて廻り、地区内の悪魔払いをする。大正期まで、天籟寺の氏子が少い頃は各戸に寄っていた。「獅子頭」の大きな口で頭を噛んでもらうと無事息災で一年間を過ごせる、と信じられてをり、（獅子舞）の巡行中、子供を連れて来て、頭を差し伸ばさせる親が多い。天籟寺大山笠では、昭和五三年に寄贈され現在使用中のものの他に、天保八年（一八三七）八月製作、と記された「獅子頭」一対が菅原神社に保管されている。

十五、鼻高面

大昔、天籟寺の（獅子舞）ではこのお面を竹竿の先につけ、（獅子舞）の先頭にたって廻っていたが、現在は行われていない。製作年代不詳の面が一対、菅原神社に保管されている。

十六、抱き布

御神体をお入れした祠を巻く布―さらしを「抱き布」という。

山笠の「大下り」後の（お神移）の神事があり、御神体は宮司により神殿から祠にお移しされる。

祇園祭典中は、（大上り）後の（お神移し）で神殿にお移しするまで御神体は祠の中で山笠に奉持されている。激しい動きをする山笠なので、祠の扉が突然開いて、御神体に不測の事故が発生する恐れがある。それを防ぐために清浄な白布―でしっかり祠を巻いている。

この「抱き布」は、荒神素戔嗚尊にあやかって丈夫な子供を産みたい、と願う妊婦の腹帯―岩田帯として非常に珍重されている。

十七、天籟寺大山笠の器材

省略

十八、大山笠の提灯

省略

十九、祇園囃子

福岡の四大祇園祭の中、博多祇園山笠にはお囃子はない。隣の小倉祇園と黒崎祇園には祇園囃子があり、それぞれユニークな味がある。特に小倉祇園は有名な祇園太鼓があって、身振りよろしく太鼓を叩く。あわせ鉦―チャンブクー―と鉦もならされるが、笛は吹かれない。戸畑の祇園囃子は小倉の祇園太鼓のような派手さはないが、豪快さでは比較にならないし、種類も多い。又このお囃子の巧拙により山笠の動き方が違ってくるので、囃子方の責任は重い。

(一) 寄せ太鼓

全員集合の合図。昔は何事につけ、寄り合いの合図としてこの「寄せ太鼓」が一番太鼓から三番太鼓までならされていた。一番太鼓はゆっくりしたテンポだが、二番から三番になるにつれてせかせるようにテンポが速くなる。大相撲の「寄せ太鼓」はお客を呼び込むためのものだが、こちらは用務のためのものだから味わいが違う。三番太鼓が打ち終る迄に全員集合出来なかった者は（組外し）の罰則があった。（天籟寺時間）に対する牽制策であったのだろう。

現在は祇園祭に限られ、（取り立）やお旅所から山笠が出発する前に打ちならされる。これに遅れても今は罰則はない。この囃子は

天籟寺大山笠以外にはない。

㈡ 獅子舞

祇園祭の数日前、大山笠巡行の道路を浄めて廻る獅子舞の行事に太鼓と笛、あわせ鉦によって奏されるお囃子。天籟寺大山笠の「獅子舞」は往路と復路とに笛の音に微妙な違いがある。一般の人もこの「獅子舞」を耳にして獅子舞行事を見て、祇園祭が間近になったのを知ることになる。このお囃子は大祓いとも道囃子とも呼ばれる。

㈢ 居神楽

菅原神社の祭典には必ず奏されるお囃子。祇園祭においては（お神移し）の際と、お旅所や所定の場所に山笠をすえたときに奏される。太鼓、笛、あわせ鉦による非常に荘厳なお囃子である。りょうりょうと響き流れる笛の音、快よいテンポでならされる太鼓とあわせ鉦、神様に捧げる奏楽である。この「居神楽」が奏されている間は出場者は全員鉢巻をとり、ひざまづいて拝礼する。

㈣ 大下り

大山笠が神社やお旅所を出発するときや、到着したときに奏されるお囃子。主体の笛の音―数人で吹く―にあわせて撥としゆ木で鉦がならされ、一定の間隔で太鼓と鉦が同時に打ちならされ、次いで、あわせ鉦もならされる。この時、担ぎ手は〃ワーッ〃と喚声を上げ足並みを揃え肩をあわせる。粛々と進む大山笠、静かに流れる笛の音、若い衆を励ますように聞える鉦の音、一転して一斉に打ちならされる三種の打楽器、そして雄叫び。

山笠関係者ならずとも、この大山笠の（大下り）に際会するとその厳粛さに打たれて粛然と襟を正すような雰囲気である。なほ、他の大山笠は太鼓と鉦をそれぞれ別の囃子方が叩くが、天籟寺大山笠では一人の囃子方が撥としゆ木を持ち、太鼓と鉦をならす。

㈤ おおたろう囃子

市民の一番耳に馳れたお囃子がこの「おおたろう囃子」である。太鼓、鉦、あわせ鉦による非常にリズミカルなお囃子で、担ぎ手は力強く〃ヨイトサ、ヨイトサ〃と掛声をかけ、勇ましく山笠は進行する。囃子方の撥さばきが悪いと担ぎ手の足並が乱れ、山笠がスムースに動かない。お囃子の練習で最初に習うのがこの「おおたろう囃子」であるが、担ぎ手のリズムに山笠を動かすこつを習得するのには、相当な練習が必要である。…中略……リズム、テンポが各大山笠それぞれ違う。特に天籟寺大山笠の「おおたろう囃子」は他の大山笠よりテンポが速い。これは担ぎ棒の長さの違いからきたものである。今の担ぎ棒は各大山笠ともさして違いはないが、昔は天籟寺大山笠の担ぎ棒は他の大山笠よりかなり短かいものであった。そのため担ぎ棒の撓い方が違い、このテンポの差が生じたのである。

㈥ 大上り

太鼓、鉦、あわせ鉦によるお囃子。大山笠が神社に帰る際奏する。担ぎ手は「アヨッサ、ヨッサ」と掛け声をかける。山笠の後棒が天神橋―参道の天籟寺川にかかる橋―を渡り切った処から、この囃子が始まり、途中（おおたろう囃子）が入り、担ぎ手にはずみをつける。今の参道は大通りから神社まで長い坂道が続いているが、昔は平坦な道をはさんで三つの坂があり、その坂道にかかる都度「大上り」を三回奏している。このお囃子は、天籟寺大山笠独特のものである。

㈦ はなの御礼

山笠が市内運行中、市民から寄せられた祝儀を披露した後奏される太鼓、笛、あわせ鉦によるお囃子。担ぎ手は拍手して感謝の意を表わす。このお囃子も天籟寺大山笠独自のものである。

二十、大山笠の楽器

省略

二十一、大山笠用語

社会一般のいろいろな集団で、集団以外の人が聞いても意味の解らないような言葉がある。二百年近く続いている戸畑祇園大山笠も例外ではない。それをこの章で取り上げてみたが、他の大山笠では使ってないものもある。特に㈠㈡は天籟寺大山笠だけのものと思われる。

㈠ 上り

「アー、来年は（上り）か」と嘆息まじりに呟いたり、「来年は一緒に（上るゾー）」と未練を断ち切るように友人に強く呼びかけたりするのを見かけることがある。

定められた年令に達して、青年から中老に、中老から若年寄になることを「上り」という。中老から上って若年寄になると、文字通りお客様になって何等の義務もなく、（祇園風）に吹かれに出場すればよいだけになるが、十数年間予備役としての中老を経験しているので抵抗感はない。然し、現役の青年組から中老に上る者は中老の（老）という字に拘わったり、青年組時代に忙しさに生き甲斐を感じて張り切っていたものが、すっかりそういうものから遠退き、青年宿を訪れるのも控え目にしなければならない、という境遇になるので、すんなりと気持の整理をつけるわけにはいかない。淋しさや諦めなど、複雑な思いが脳裏を去来して前述の言葉になる。

こういった悩みも理解できないことはないが、ここで特に認識しなければならないのは「中老」という地位は非常に名誉あるもので、青年時代の働きが認められてはじめてなれるということなのである。たんに祇園祭当日だけ山笠を担ぎに出て来ていた者や、青年組時代の行為が甚しく悪い者は、中老組に入ることが出来ないのである。中老に「上って」その年から全く祇園祭に出場して来ない者も稀にはいるが、大部分の者は好きな祇園さんのことなので太鼓がなり始めると、悩んだことなどケロリと忘れて出場して来る。

㈡ 遊び

「今年は（遊び）やから楽（ラク）やなあー」と話す者がいる。青年組から中老組に入った年は山笠の一切の世話活動を免除される。

このことを「遊び」といい、この者はただ山笠を担ぐことのみに専念すればよい。今年まで青年幹部として、祭りの準備から後始末まで忙しく働いていた者に対しての慰労の意味からこういうしきたりが出来たのであろう。然し翌年からは中老の世話係として、中老の会合の際の飲食の世話、鉢巻、帯の配付など、青年幹部のときの仕事とは一変して下働きの仕事が待っている。昨日に変る今日の姿、と気分が落ち込んでしまう者もいるが、この世話係を経験しないと最高の（見〆）の役にはつけない。年令に断層があり、中老に入って来る者がいない場合は何年も世話係を務めなければならない。

㈢ 捩練り（モジネリ）

大山笠の台枠の左右を束ねたかずらを捩じって締めつける。この作業を「もじ練り」といって、大山笠組立の際の最も重要な作業であり、かなり時間を要する。（もじが反（カ）える）といって、ロープを引っ張って（もじ棒）が都合よく上下さかさまに反えればこの作業は完成である。大山笠の台枠を組むのには、釘、ボルトなどは一切使用しないで、山野に自生しているかずらを使用する。二・五トンもの重量がある大山笠の激しい動きに耐えられるのは、かずらの強靭性、弾力性が最適なのである。台枠の前面と後面は左右と違い、小量のかずらで締める。左右側の「もじ練り」が主体であるため、これを横もじという。

㈣ 棒吊り

担ぎ棒を大山笠の台に取り付ける作業。（もじ練り）で台枠をがっちり組み上げた後、「棒吊」を行うが、「もじ練り」に次ぐ重要な作業である。二・五トンの重量を支える担ぎ棒は、大山笠の動きにつれて左右、上下へ撓りが出て来る。この撓りが極端に出たり、かたよったりすると担ぎ難くなり山笠がスムーズに進行しない。それを防ぐためにはこの「棒吊り」の作業が大事なのである。前棒、後棒の長さを正確に測り、棒のバランスを見きわめて木製のくさび―矢と呼ぶ―で固定し、ロープで締める。

㈤ 棒わり

棒ばな―棒の先端から身長の高い順に担ぎ手の担ぐ位置を決めることを「棒わり」という。

―中略―昔天籟寺の人口が少いときは担ぎ手の交代要員が居なくて「棒わり」で決められた位置を離れようにも離れられず、大変な苦労をしていたようだ。

㈥ 棒ばなをとる

進行中の大山笠の楫をとることを「棒ばなをとる」という。左右の担ぎ棒の先端をしっかり両手でとり、山笠の進行をぐらつかせないようにする。もともと山笠筆頭がこの役に当るのだが、非常に（ヒリョク）がいる役目である。

㈦ ひかえ綱をとる

提灯山笠の四本柱の先端から左右に各一本おろしている綱を（ひかえ綱）という。十米以上の高さがある提灯山笠は強い風が横から吹きつけたり、道路の高低差により左右のバランスを失うことがある。極端に傾くと横転の危険さえある。このときに（ひかえ綱）を使って引き戻し、バランスを保つのである。―以下略

㈧ 肩を入れる

担ぎ棒について肩を入れて担ぐことである。きちんと（棒わり）をして（肩を入れ）て担げば、あの重い大山笠が調子よく動くのである。―以下略

㈨ 肩を抜く

山笠の担ぎ手が重さに耐えかねて、かき棒から肩をはずしたり、かき棒から離れてしまうことを「肩を抜く」という。一人が「肩を抜く」と連鎖反応をおこして、山笠が潰えてしまうことになる。交替要員は上手にタッチしなければならない。

㈩ 肩をかえる―肩がえ

進行中の山笠が一八〇度進行方向を変えるときに「肩がえ」をする。山笠は停止しているが、地面におろさずに担いだままの状態で担ぎ手がむきを変える。前棒が後棒になることになる。「肩をかえる」ときは瞬間的ではあるが、（肩を抜く）ので棒ばなを担いで居る者が踏ん張り、一人ずつすばやくやらないと山笠が潰えてしまう。

㈠㈠ 五段上げ

十二段の提灯山笠を組み立てる際の熟練度が要求される作業。台座の上の四米の高さの四本柱の先端に、天丸を頂点とした、五七ヶの提灯を付けた四角錐―（五段）を下から突き上げてとり付ける。三本の竹の股で突き上る組と、四本柱の上でこれを受ける組との協同作業である。〃ヨイサ、ヨイサ〃の掛け声の中で上げられるが、双方の呼吸が合わないと（五段）が傾いたり、落下しそうになったりする。―中略―天籟寺大山笠と他の大山笠では、「五段上」に大きな違いがある。他の大山笠では、（五段）を二人で担いで柱をのぼり、それに合せて（竿の股）を使う。天籟寺の大山笠の「五段上げ」は（竿の股）の操作が主体であって、（五段）を担いで登ろうにも柱の腕木が邪魔になってのぼれないのである。

又天籟寺大山笠では「五段」を上げたとき、昔は柱の頂上に上っている者がこれを廻して四本柱の先端に取り付けるという、派手な作業をしていたらしいが、熟練者がそれぞれ呼吸をあわせなければ出来ない事である。

㈠㈡ 五段しぼり

「五段」の四つの稜線をロープでしぼり、（五段）の枠を補強することを「五段しぼり」という。―以下略

㈠㈢ 勾欄しぼり

勾欄を勾欄台にロープでしぼり付けることを「勾欄しぼり」という。勾欄台に取り付けている鐶（カン）と勾欄の擬宝珠の柱の部分をロープで結び付け勾欄が脱落しないようにする。―以下略

㈠㈣ 化粧巻き

（棒つり）をしたロープの上から、汚れのない新しいロープで台柱を巻くことを（化粧巻）という。

幟山笠の場合は、水引、切幕で山笠の台は力士が化粧まわしを着けたように、美しく飾られているが、提灯山笠のときは幕類の一切は取外され素のままの姿になる。そのため、白いロープを台座に巻き、見ばえをよくしているのである。

二十二　服装

二十三　提灯山笠演会場の変遷

共に省略

二十四　「おおたろう」の意味

「おおたろう囃子」の由来は玉井政雄によれば、天保五年（一八三四）歌舞伎の七代目団十郎が博多で興行するため、一座を率いて西下の途中戸畑を通過した。その時、一座の囃子方の中に大太郎という名前の者がいて、戸畑の者にお囃子を伝授したので、その人の名から名付けられた。

又、別説に、戸畑に大太郎なる男がいて、伝授を受けたお囃子から更に案を重ね、独特のお囃子を作ったこと。又玉井氏の別説によれば、昔、天籟寺川で砂鉄が採取されていて、その砂鉄をたたらと呼ぶ溶鉱炉のようなもので溶かし鉄を作っていた。ある年大きな（たたら）が作られ、それが祝われたとき（大たたら囃子）という囃子が出来た。それが訛った「おおたろうばやし」になったのではないかという。以上、玉井氏は人名からきたものと道具からきたもの、

二説をあげているが、明確には解らないとしている。

別に昔は（お籠り）に酒樽を叩いてお囃子をやっていたので、大樽囃子から転化して「おおたろう囃子」と呼ぶようになったという説や、このお囃子の呼び名の起りは不明だが「おおたろう囃子」と呼ぶのは誤りであって、山笠を威勢よく担ぐときのお囃子は「おおたら囃子」が正当である、という説もある。このように「おおたろう」については諸説紛々として定説はない。

以下二五（郵便はがきの大山笠）二六の文化財指定（これで終り）は省略。

天籟寺大山笠 物知り帖

林 昌昭

一、祇園風について

祇園祭に出場することを、（祇園風にあたる）或は（吹かれる）という。祇園風とは、東風で春が来て植物が芽を出し、秋が来て西風が吹き木の葉が落ちる、という自然現象の風ではない。

祭神である須賀大神—素戔嗚尊が吹かせる風であって、身体には感じないが、東、西、南、北、四方からドット吹き寄せたり、上から吹き下したり、下から舞い上って来たりするのであろうか、老、壮、青年から幼児まで躁状態にする不思議な風である。（あたる）という意味は、食中毒などの食物にあたるというのでなく、風を身体に受けることなのだが、此の風に巻き込まれて憑きものがするのだから中毒の意味を多少含んでいると解してもよいのかも知れない。とにかく、此の風にあたらなければ一人前の男性とは認められないし、この風にあたると、一年間息災で過せると信じられている。

又、祭りの初め「今年もええ祇園風にあたらせてくれョ」と青年幹部に声をかける年寄がいるが、これは祇園祭を受け継いでいる後輩に、立派な祇園をやってくれるように願っての言葉である。

二、祇園さんと四つのタブー

永い歴史を祇園さんなので昔風の禁忌事項がいろいろある。代表的なものを四ツ挙げてみたが、はたしてこれが全部守られているかどうか分らない。こんなタブーがあることを知らない人もおるし、若い人には無理なものもあるようだが、㈢項だけは誰でも知っているし、守られているようだ。

㈠ おんなと祇園さん

お籠り、又宿開き以後—祇園祭典中と言う人もいる。—は女性とまじわってはいけない、というのがタブーの一つである。（女性をさける潔斉法は仏教の影響から後で加えられたもので、もともと神道にはなかったものなのだが……）これは現代風に考えても頷ける。

精力を浪費せずに、山笠にのみ集中せよ、ということなのであろう。昔は、特にこのことは固く守られていた。その欲求が大上り、お神移しのあと、神社周辺の土手や、薮の中で爆発した。落花狼籍、若い男女のあられもない姿態があちこちで見られ、目をつぶって通らなければならなかったそうである。このことを他人事のように話をしてくれた年寄が、その行為者であったのか、単なる傍聴者であったのか、残念乍ら聞きもらした。

㈡ 胡瓜と祇園さん

幟の上部や勾欄に、須賀大神の紋章が表示されているが、この紋章ときゅうりの切口が酷似しているので、おそれ多くて祭典中はきゅうりを食べないという風習が昔からある。願掛けで、お茶断ちや、好物の食物断ちをするが、それと同じ主旨で、旬の美味しいきゅうりを断ってまでお神様に奉仕するという信仰心が昔から強かったのである。然し、所が変ればタブーも変るものらしく、豊前地方では祭りの初日にきゅうりをいただき—きゅうりもみにして食べる—祇園さんのお力を身につけるというならわしがある。

㈢ 喪と祇園さん

身内の者が死亡した服喪中は神社への参拝はもとより、鳥居さえもくぐってはならない、と昔から言われている。いわゆる（シニビ）がかかるのである。

祇園囃子でも、服喪中の者が出場すれば山笠に事故がおこるとされて、出場を遠慮するならわしがある。此の期間は百日とされているが、期間中でも神官のお祓いを受ければ出場出来ることになっている。ところで、（ヒ）の期間は須佐神社（今井祇園）の高辻宮司著（神奈備頌）によると、例外はあるが（イキビ）も（シニビ）も七日が分れ目で、親の死でもこれではれるそうで、お神様に一番近く奉仕する神主でも実現の死去という最高のケースで、十日間を忌とするそうである。

㈣ お産と祇園さん

前項にも関連があるので、少し長くなるが前記（神奈備頌）の（イキビ、シニビ）の章を引用すると……前略、生死に関係した人は一定の期間、ハレの場を遠慮して忌みこもるという行動基準がヒである。死という凶事にかかわった者のヒは分るが、出産という祝事をヒとするのは納得できないという声も高いが、これは出産に伴う出血を忌む思想によるもの、それは（イキビ、シニビ）より強いという声もある。とは別に神社が規制して来たわけではなく、この国土を生きつづけた民族の生命観に根ざす考えである。それだけに力が強い、ただハレの極点にある神事とあい入れないヒは神社で特に問題となる。最強の神威をもつ神として信仰されている本神社では、ヒの観念はおろそかにはあつかえないものがある。祇園祭では殊にそうだ。近親の生死という特殊な時に、心身を沈潜させる期間を過ごすことは神とのつながりで生かされている人間のけじめだ。身をかがめて、次の飛躍に備える裏の神仕えである。近親の死には追慕の限りを尽して新しい世代をうける。誕生した子に生命の畏敬を感じて新しい人生を用意する。これがヒの心得だろう。無為な時の経過だけでヒが晴れるものではない……後略。

註、「ハレ」とはケ（常）に対する語、いづれも古語で、ケ—平生、日常とは違う（特別な）という意味のない言葉である。例えば、（晴れ着）の語源は（ハレの日に着る着物）ということで、特別な日に着る衣服という意味である。

三、四 省略

五、天籟寺祇園囃子の名人

大正期から戦前にかけて、大鼓のセンさん（安田千太郎）、鉦のヨンさん（林清次）、あわせ鉦のキヨさん（林喜代次郎）と謳われたトリオがいた。

囃子方はどの楽器もこなさなければならないが、それぞれ得手不得手があり、得意な楽器を自ら分担するようになり、得手なものには更に磨きがかかることになる。

前記の人達の時代の前後にも、笛の大岡寿吉さん、鍔坂佐六さん、太鼓の安田信太郎さん、笛の安田末太郎さん、あわせ鉦の林博さん、と天籟寺大山笠の囃子方の名手を数え上げるときりがない。

現在では太鼓のトモちゃん（林友頼）、鉦のタケちゃん（村上猛）、あわせ鉦のスッちゃん（安田末太郎）、更に笛を加えて、笛のヨシヒロさん（鍔坂宜宏）、ということになる。これ等の人達に続く若手囃子方の台頭を願うのは筆者だけではない。

六、はな（祝儀）の御礼の口上

「東西、御覧（コロウ）じかけの金子一封、右は当所〇〇様より天籟寺山笠連中に下さる」

囃子方が山笠台上に立上り、慰斗袋をかかげて音吐朗々申し述べるのがこの口上である。—金子一封のところが清酒〇本になったり、ビール〇ケースになったりする。

山笠が市中を巡行中に寄せられた祝儀の披露なのである。昔は祝儀を出した人の名前を会計が紙にかき、それを囃子方が披露していた。（はなの御礼）のお囃子が口上のあと奏せられ、担き手は一斉に拍手をする。他の山笠にはこの口上もお囃子もない。

七、お囃子の変った呼び方

祇園囃子を奏するのに使う打楽器は、太鼓がトン、トン又はドン、ドン、鉦はカン、カン、あわせ鉦はジャン、ジャン、と発する音はきまっていると思われるが、それがそうでないというのが面白い。

永い歴史を持つ天籟寺大山笠では、単に耳に響く音だけではなく、心を打つ音もあり、聞え方もいろいろのようである。

㈠ ドゴ ドゴ

山笠が動き出す前に太鼓、鉦、あわせ鉦を一斉にこきざみにならすことを「ドゴ、ドゴ」をやるという。音を表現したものである。—中略—この「ドゴ、ドゴ」のならし方の巧拙が山笠が早くあがるか否かにかかわるのだから、お囃子も難かしいものである。又、市内巡行中山笠が停止したときも、「ドゴ、ドゴ」がならされるが、天籟寺山笠では短く切りあげる。休憩の合図であり、担手は担ぎ棒から離れてもよい。

㈡ コケーン コケーン

（大下り）のお囃子の際にならされる鉦の音の表現である。天籟寺大山笠では、一人の囃子方が撞と撞木を持って鉦を叩くのでこのような響きになる。（大下り）のお囃子が奏されているときは山笠を地面に下してはならない。というしきたりが昔から脈々と続いている。担ぎ手は（こける）—親亀こけたら皆こけた、というあのこけるである—のは恥た。こけんゾこけんゾ、と懸命になっているので鉦の音がこのように聞えるし、又、決意の表明の音でもある。将来も、大下りばかりでなく祇園祭運営でも「コケーン、コケーン」といかなければならない。

㈢ ネコネコマイタ サンタローマイタ

（大上り）のお囃子をこのように呼ぶ。出処、意味不明であるがお囃子の調子にピッタリあっている。担き手は〝アー、ヨッサヨッサ、ヨッサヨッサ〟と掛け声をかける。何故祇園祭にネコ（猫）—猫であるかどうかも不明—が出て来るのか、マイタも、巻いた、播いた、撒いた、と幾つかの語句が頭に浮ぶが一切不明である。又サンタローとは人名と思われるが、三太郎なる人物か、昔天籟寺に居たかどうか皆目分らない。

詮索するすべもないが、（大上り）のお囃子をこのように呼ぶのには農村であった天籟寺に、何か土くさい物語があったような気がしてならない。因に、各地の民話や落語に登場する与太郎や三太郎はすこし間が抜けた好人物である。

㈣ トロスケ トン

昔の人は、太鼓の音が「トロスケ、トン、トロスケ、トン」と聞えていたそうである。今では全く天籟寺では姿を見ない、フクロウの鳴き声と同じだというのである。

森や木立の多かった天籟寺には野鳥の種類や数も多く、野鳩、ひよどり、ミミズクなどに交ってフクロウもいた。そのフクロウの鳴き声は、〝ホウ、ホウ〟と一般的に言われているが、〝トロスケ、トン〟そ聞えるというのが奇妙である。のんびりした昔の天籟寺の夜の森では、フクロウは、このように響いていたであらう。

㈤ トン テン トロンコ トン テン トン

太鼓を叩くときの叩き方を表したのが「トンテン、トロンコ」である。（トン）が右撹、（テン）が左撹、（トロンコ）が両撹（右をやや先に叩く）。

（ドゴ、ドゴ）からおおたろう囃子に入っていくときは、（トロンコ、トン、トン、トン）と入っていく。又山笠が停止したときの（ドゴ、ドゴ）では、（トロンコ、トン、トン）で太鼓を打ち止める。

八、省略

九、天籟式手〆

祇園祭中日、七月十四日の提灯山笠競演会が終って山笠がお旅所に着いたときや、七月十五日夜大上りをしてお神移しがすんだ後に、委員長、総監督の挨拶が行なわれ、その後に中老の見〆の音頭で手が〆られる。方式は〝よーシャンシャン、おシャンのシャン〟と見〆の声で手をたたく。一般に行われる手〆のように派手なものではなく、かざり気のない素朴なものであるが、勇ましく、賑やかな祇園祭の終りにはかえってふさわしく感ぜられる。

十—十四まで省略

十五、「小天山笠」誕生のいきさつ

大正の或る時期—一年だけだったという説もある—子供の担ぐ山笠が天籟寺にもあったらしいのだが、絶えて久しく、詳細は分らない。その後、子供山笠は車輪をつけロープで引っ張る、いわゆる